愛知工業大学研究報告
第17号B　昭和57年

近世浄土真宗本堂の研究（その XI）

牧田川流域の養老地方の寺院

岡　野　　清

Study of Main Hall in Jyodo Shin Sect in Edo Period (Part XI)

Kiyoshi OKANO

Allmost all the templs in YÔRÔ distrect which situate in the basin of the river MAKITA belong to the OHTANI sect in JYODO SHIN sect. Main halls especially of the small and middle size in these sect which were very primitive in their original forms, became all at once comperatively gorgeous in the middle and late of EDO period.

But in their primitive original type and their advanced form, I found out types peculiar to this district.

In this research, I give 6 examples of such kind to show above-mentioned facts in this district.

はじめに

東海地方には真宗本願寺系の寺院が多く存在するが，建造物の実例については布教地も偏在しているし，近世末に繁栄して改築したものが多く，他宗に比して古い実例が少ないのであるが，養老地方では，この地全体に一団の大谷派寺院が存在し，その中に江戸時代初期から中期に及ぶ建立のものを数例得たので復原した上で，当時のこの地方の本堂の形態を究明したものである。

真宗の状況

岐阜県南部の養老地方に浄土真宗の教団が組織化されて来たのは室町時代末から江戸時代初期にかけてのことであった。かって本願寺派の蓮如（1415～99）の積極的な布教策以来，山科，石山の本願寺を中心として，近江，越前から北陸に広まり，その勢力は時に世相を混乱させてその地方の宗教地盤に影響を及ぼした。東海地方でも永禄6年（1563）には家康と，又元亀元年（1571）には伊勢長島で信長と一戦を交える程，既に本願寺の宗旨が庶民にまで布教されて住民の帰依を得ていたのであった。牧田川流域のこの養老地方の三町の現在の寺院数の中で本願寺派系（特に大谷派）の占める数（表1）を見れば明白であり，養老町では101ヶ寺中85ヶ寺が大谷派である。

もともとこの地方の古くからある寺院は，往古は天台宗であったが，この室町時代中期以降には現存している多くの寺院が本願寺派として創立又は転宗に及んだので

表1　養老地方三町の現存宗派別寺院数

宗派＼町村	養老町	南濃町	海津町	計
密　教	3天台	0	2真言	5
高田派	0	0	1	1
本願寺派	1	0	0	1
大谷派	85	22	38	145
浄土宗	3	6	4	13
臨済宗	9	3	2	14
その他	0	1	1	2
計	101	32	48	181

寺院名鑑　岐阜県仏教会

表2　養老町において中世末期に本願寺派として創立又は転宗した寺院数

年　号	寺数	年　号	寺数
長　禄 1457—1460	1	享　録 1528—1532	2
寛　正 1460—1466	5	天　文 1532—1555	6
応　仁 1467—1469	1	天　正 1573—1592	1
文　明 1469—1489	9	文　禄 1592—1596	1
明　応 1492—1501	4	慶　長 1596—1611	4
永　正 1504—1521	3	寛　永 1624—1644	2
大　永 1521—1528	7	計	46

養老町史下

あるが，主要地である養老町内の現在の大谷派寺院の中で，創立又は転宗によって新たに大谷派として誕生したもので，時期がわかっている48ヶ寺中実に46寺がこの時期に当てはまっている。この地方の永い宗教史からみると，二世紀弱の間に大量の急変ぶりであった（表２）。

当時の本願寺は，丁度蓮如の跡を継いだ実如（1457～1526），証如（1516～1554）の動乱期にあたり，山科本願寺も焼かれたが，三河の実円，伊勢の蓮淳らと相扶けて盛り返し，着実に庶民層の支持を得て勢力を伸ばしたので，法運益々栄えるに至った。同宗が養老地方にも積極的に進出してきたことは，ここに扱った六つの寺院の創立，転宗も，わかっているものはみなこの期に当たることでも知られる。

これらの寺院は道場として造られたらしいが，現状の本堂が成立した時は殆んどが時代が降るので，多様性があるものの，復原によって建立当時の形態を探ってみると，ほぼ同一の形態に帰着することがわかる。又，堂の原型は江戸初期から中期までは同様規模のものは時代にかかわらず類型化しているので，規模別に二つに分けて取り扱うことにした。

小型の本堂

養老寺本堂　　養老町養老
慶長12年（1607）頃には転宗，現本堂の建立はその頃か。

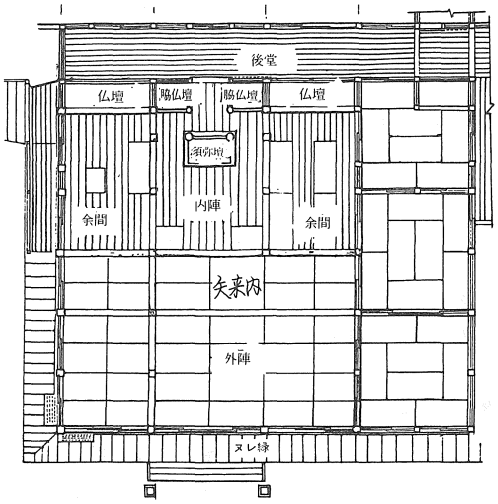

図１　養老寺本堂現状平面

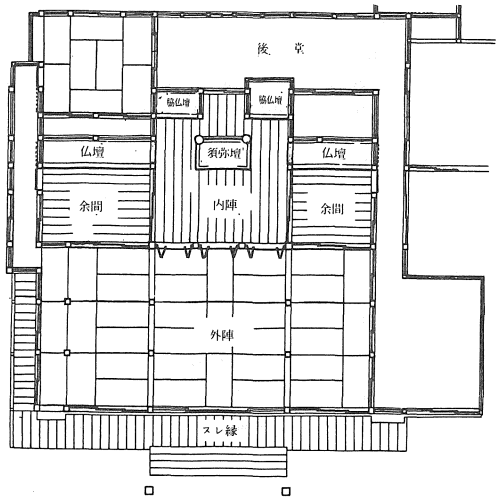

図３　相順寺本堂現状平面

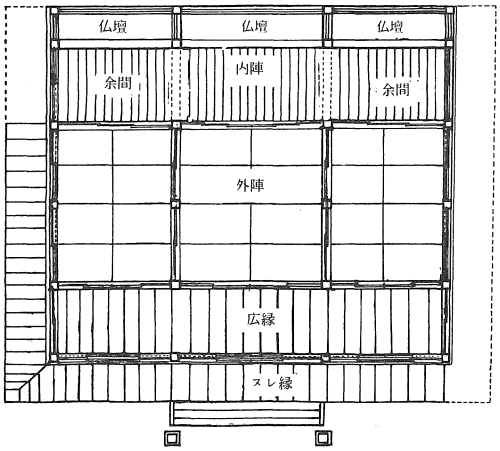

図２　養老寺本堂復原平面

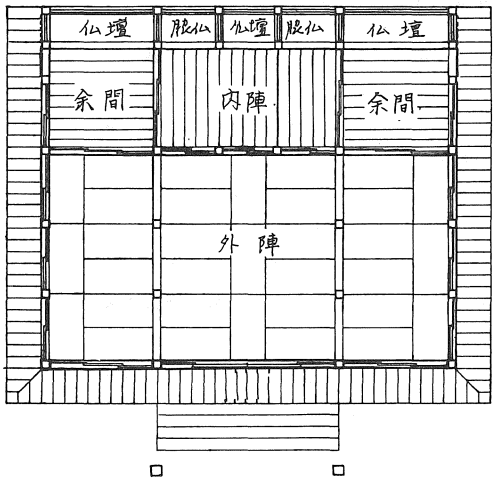

図４　相順寺本堂復原平面

相順寺本堂　養老町飯田
天文５年（1536）本願寺派で創立，
現本堂は元和６年（1620）建立。
西浄寺本堂　南濃町上野河野
創立不詳
現本堂は虹梁の絵様などから18世紀前半頃と思われる。

以上の三堂は大分改造されており，当初の形は現状とは異なるが，何れも小型本堂の典型であり，本堂としての最少限の必要機能を満たすための平面で構成されていたことが復原の結果わかり，共通した平面になる（図２，４，６）。また各堂とも装飾意匠は簡素で，何れも茅葺屋根であった。

養老寺本堂

この寺の創立は古く，養老２年（718）に始まり，七堂伽藍が整備されていたと伝えられている。法相宗から，鎌倉時代に天台宗に変ったが，永禄６年（1563）信長の兵火で諸堂烏有に帰し，後に高須城主徳永石見守が再建に着手した。この頃，教如上人が春日谷を教化中にこの寺の住職が帰依して転宗した。真宗大谷派に属したので，堂宇が成就した慶長12年（1607）には大谷派の寺院として誕生していたと思われる（住職談）。現本堂は養老山脈を背景にした東向の入母屋造桟瓦葺の堂で，一間向拝付，横長で本堂部分の北側面に八帖二間を並べて付けたいわゆる堂庫裡型であるが，当初は茅葺屋根であった（図１）。堂部分のみを復原すると，外陣を方丈のように三室に分けて引違建具で間仕切っていた（向って左側に一部鴨居が残る）。矢来内はなくなり（敷居は後補），手前一間巾が広縁となる（向って左の元広縁境には以前の小壁内法長押鴨居が残る）。この本堂を六間取りにする方法は真宗型の本堂ではかって存在していないが，或いは再建中に転宗したことに関係し，元は客殿風のものであったかも知れない。元は小堂であったものが，外陣奥に一間の矢来内を取ったために外陣が益々狭くなり，遊ばせてある広縁に畳を敷込んで境の敷鴨居を撤去し，外陣と一体化したのであるが，その際中央に出てくる柱を１本撤去したのであった（写真１）。内陣と両余間境通りにも柱に貫跡が残るが，ここを壁にしたことも密教時代と関係があるかは不明。次に内陣の来迎柱装置はなくなり（新材）余間の仏壇より１間半前の柱の側面に元の両余間仏壇の前框の痕跡があり，またこれより半間後ろに柱が建ち，そこに背面壁の貫跡があるので，もとの余間仏壇はそこまで前進して，内陣，余間仏壇とともに堂の背面に半間巾の仏壇が並んでいたことも考えられる（図２）。現在の来迎柱や余間仏壇は絵様の型式から判断して江戸中期以後増補されたものであろう。なおこの堂は真宗寺院の本堂であるとすれば全国的にも江戸時代以前の堂として極めて稀少なもので，今後の研究に資したいものである。

相順寺本堂

天文５年（1536）に本願寺十世証如に帰依した西蓮がここに寺を創建し，元和６年（1620）本堂を建立した。正徳元年（1711）に「長五間半，梁三間に両方へ一間宛軒を出したる」（同寺文書による）。とあるが調査した結果によると実情とは合わない。後方には更に漸次拡張して中型本堂にまで成長している。内陣内にも来迎柱や独立した須弥壇を設けて行道出来るように整備されている（図３）。この堂を復原すると外陣の両端間の見付巾は１間半で終り，その外側部分はなくなる（その通りの柱列の外側に風蝕あり）。南側の余間もその通りで終わり，外側の１間は後補となり，北余間同様に見付巾１間半となる（南余間内のその通りの柱横に垂壁の痕跡あり）。次に

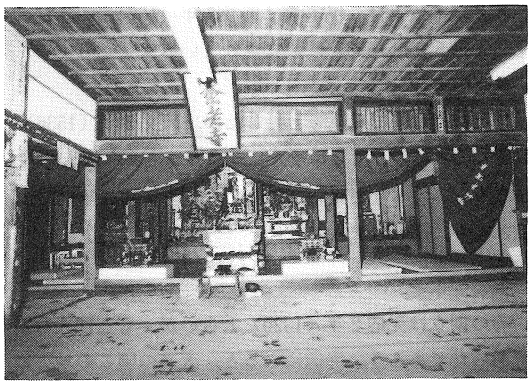

写真１　養老寺本堂外陣，内陣前方右の柱や小壁は取払って外陣を一体化している

写真２　相順寺内陣から北余間を見る
もとの内陣背面隅に斗栱が残る

内陣内部の独立須弥壇はなくなり，その位置まで後方隅にある脇仏壇がそのまま前進して一直線仏壇が堂の背面に並ぶ（図４，現余間仏壇内陣寄り前柱の内陣側の側面下部にもと脇仏壇前框を取り外した痕跡がある）。内陣の格天井もそこまでで終り後方は継足しで，この柱上にのみ出三斗斗栱が載り（写真２），長押もこの柱で切れる。なお後堂はなかった。当初からこの他には斗栱，蟇股は一切用いず邸宅風に簡素な取扱いでまとめられていた。内陣前の高肉彫欄間（金泥塗）も後補で，元は筬欄間か，外陣内柱列間と同様に住宅式の透彫の板欄間であったであろう（写真３）。虹梁も外陣の内陣前から出した柱列に繋ぎに入れた１間のものが２本のみあるだけで余間仏壇上にも使われていない（写真４）。内陣前の双折巻障子（柱間のもと敷鴨居の溝が残る）円柱の来迎柱及び斗栱，須弥壇，黒漆塗及び金箔荘厳等の仏堂風のところは後補である。

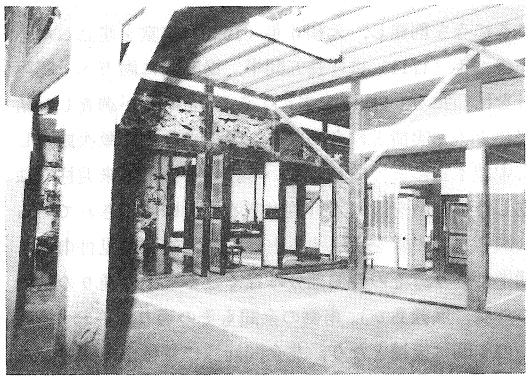

写真３　相順寺本堂　内陣前は高肉彫欄間
余間前は筬欄間
外陣内は透板欄間

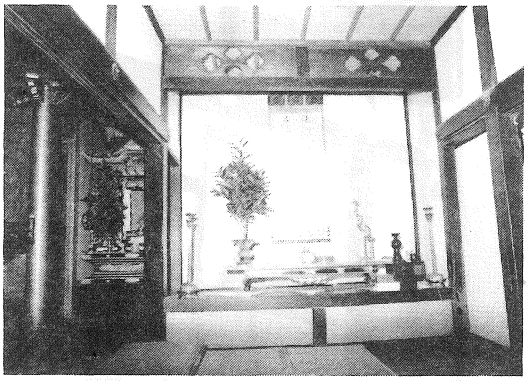

写真４　相順寺北余間仏壇

西浄寺本堂

前二者より建立されたのはずっと降り，虹梁，木鼻の絵様からして享保（1716～）から宝暦（1751～）頃の建立と思われる。建立当初は機能を満たす最少の規模にまで縮少されたもので，広縁もなくなり，地方の集落における小型本堂の典型となり（図６），相順寺本堂の復原平面と基本的に一致する（図４，６）。装飾は富裕な寺のものから見れば簡素であるが，前二者より時代が１世紀半近くも降るだけあって，内部の見せ場に彫りが増えて，外陣中柱間の虹梁や，内陣前面上部の高肉彫欄間等に真宗型の荘厳を見る（写真５）。外陣の両脇の間及び余間巾は最少の１間巾となり（南余間のその通りの柱外側に風蝕及びもと壁の跡あり），内陣の奥行については相順寺同様に来迎柱装置はなくなり（新材），余間仏壇通りの柱の内陣側面にあるもとの脇仏壇框の痕跡によって，背面に一直線仏壇が並んでいた（その柱の背面に風蝕）。内陣，前面の柱間にある３組の双折巻障子も元は引違い格子戸であった（敷鴨居に溝が残る。図６）。

中型の本堂

景陽寺本堂	養老町高田 天文14年（1545）本願寺派として創建，現本堂は元禄５年（1692）
浄蓮寺本堂	養老町三神町 天文５年（1536）天台宗から転宗，現本堂は正徳３年（1713）建立
福勝寺本堂	養老町小倉 元応２年（1320）創建して，天文の頃に本願寺派に転宗，現本堂は絵様の意匠などから18世紀前半頃と推定出来る。

景陽寺本堂

天文14年（1545）の創建時には寺号もなく，その後しばらく無住となっていたが，慶安４年（1651）景陽寺の寺号及び木仏下付，現本堂は貞享５年（1674）四本柱御免，元禄５年（1693）に建立されている（養老町史）。

浄蓮寺本堂

もとは天台宗で青蓮寺と号したが，天文５年（1536）改宗して真宗浄蓮寺と改めた。その後大谷派に属して今日に至る。現本堂の建立は寺記によると正徳３年（1713）とされる（養老町史）。

福勝寺本堂

寺の創立は元応２年（1320）と古いが，もとは天台宗であったであろう。寺伝によると，天文の頃この地方に勢力を拡めてきた本願寺派に帰依して転宗したと言う。現本堂の建立については正確な記録はないが，他の同時

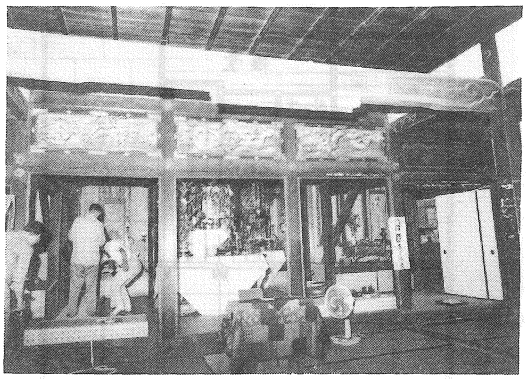

写真 5　西浄寺本堂内の装飾

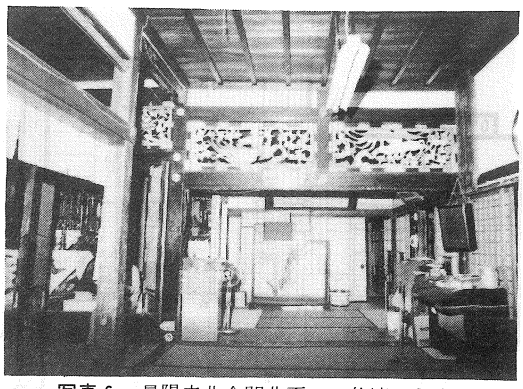

写真 6　景陽寺北余間北面には仏壇はなく，現在は襖仕切で後室へ通ずる

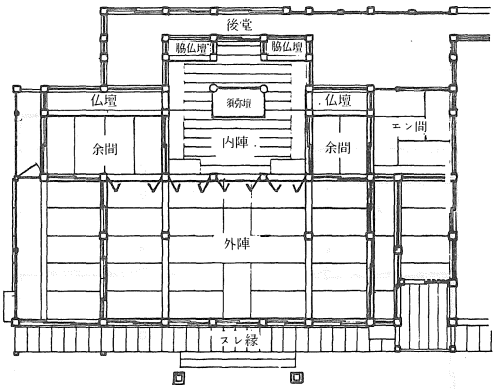

図 5　西浄寺本堂現状平面

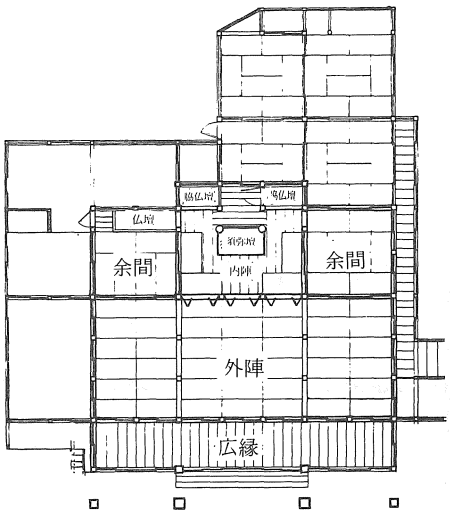

図 7　景陽寺本堂現状平面

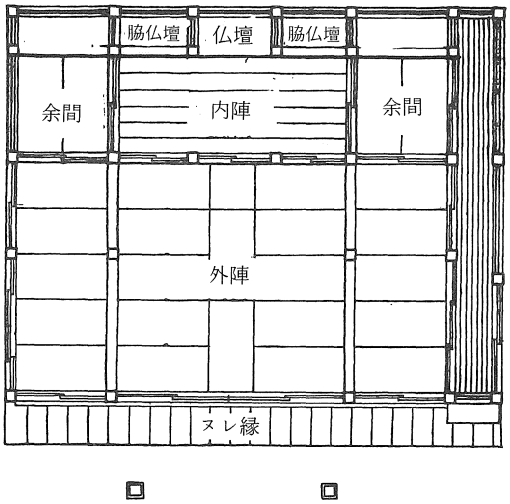

図 6　西浄寺本堂復原平面

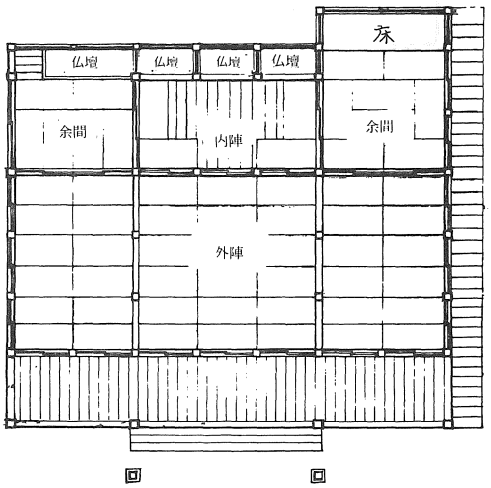

図 8　景陽寺本堂復原平面

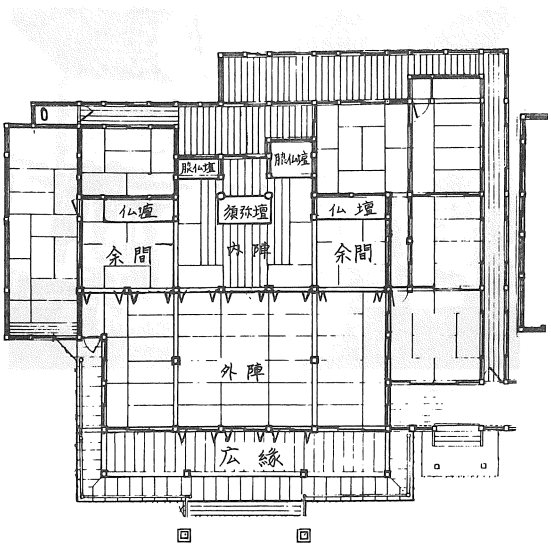

図 9　浄蓮寺本堂現状平面

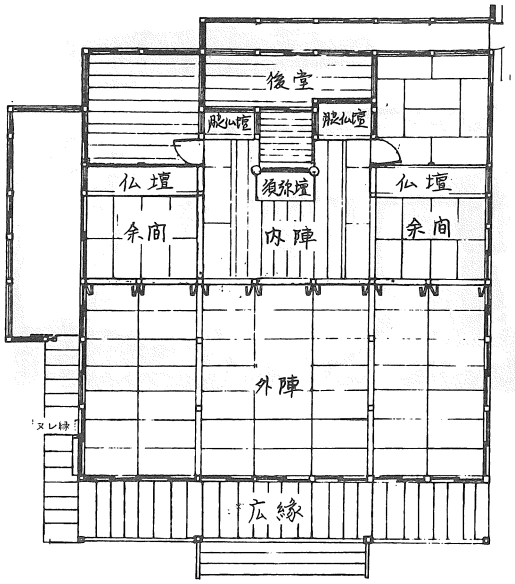

図11　福勝寺本堂現状平面

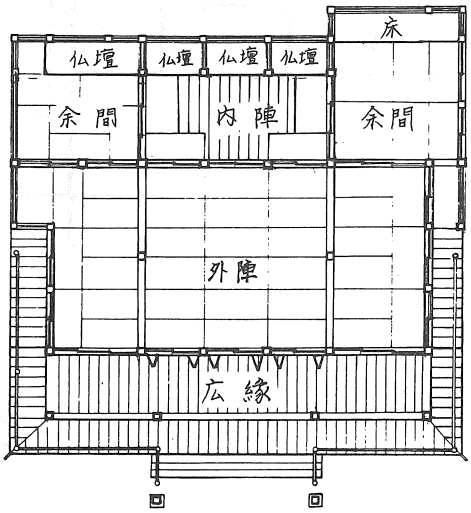

図10　浄蓮寺本堂復原平面

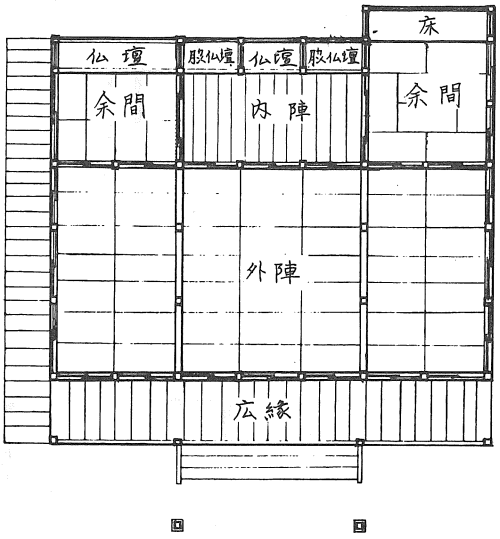

図12　福勝寺本堂復原平面

代に建立されたものの絵様の意匠などから類推して18世紀前半に擬せられると思う（寺伝及び養老町史）。

上記の三堂は，建立時もほぼ同時であり，寺格，規模も同格であるので，一括して取扱った。現本堂は何れも建立後，順次拡張されて左右及び後方に延びて大規模なものとなっており，現状平面もそれぞれ違った形となっているが(図７，９，11)，復原してみると整理されて三堂とも平面は極めて画一的なものとなる(図８，10，12)。それらの共通した特徴は

○　堂の正面中央に１間の向拝がつく。

○　堂の前面にのみ１間巾の開放された広縁を堂内に取り込んで設ける。広縁側柱は堂内の柱列(内陣見付柱)の位置に建てる。広縁は切目板張。

○　外陣内は内陣見付巾通りに柱列をつくって３分され真宗特有の外陣となる。

○　内陣見付巾は三堂とも中型で３間，余間巾は1.5間～２間の規模となる。

○　現内陣の正面は何れも金巻障子で飾っているが，敷鴨居に溝が残っており，もとは何れも引違いの柳格子か襖であったものであろう。余間前も同様とする。(景陽寺は最も古式のまま残されており，余間前は現状が襖のままである。)

○　内陣前上部は余間前より長押を背違いに高めて黒漆の地塗に金泥塗りとして飾る。柱上には景陽寺，福勝寺は住宅式で，斗栱，蟇股，虹梁を用いず，外陣廻り，内陣廻りも一そう飾らないが，浄蓮寺は外陣柱列間に虹梁を架したり，内陣前通り柱上に出組斗栱，蟇股，支輪が付され，黒・金色で荘厳されるなど，仏堂化が一段と進む。

○　内陣内部は復原してみると，当初は外陣の荘厳に比して，斗栱，蟇股もなく，未だ簡素である。

○　現来迎装置はなくなり，何れも内陣の脇仏壇が前進して余間仏壇の通りと並ぶ一直線仏壇となり，中型以下の古式なものとなる。

○　向って右余間（北側余間）の背面は前掲の小型本堂の例や真宗寺院の一般型とも言うべき左右対称の余間仏壇を持たず，その分だけ半間後退して八帖間をつくり，その背面に床の間を設けている。このことは既に発表してきた尾西市の法信寺本堂（元禄３年　1690）や稲沢市の徳正寺，瀬戸市の西光寺本堂にも認められ，この地方の江戸中期以前の真宗寺院中型以下の本堂の一つの型式であるが，ここでも当時の定型になっていた地域内にあることを示すものである（景陽寺では床の間が現存している)。他の二者は背面の室の柱下部に旧床框の取付跡が認められて，旧床の間の背面壁は裏座敷へ半間出張っていたが，これは撤去されている。この余間が接客の室として書院の役を果して来たが，その後の拡張でこの書院，客間としての室は後方又は側方へ移動して広くされ，使用している（図７，９，11)。

むすび

図２，４，６に示すように，この地方における小型真宗寺院本堂は，おおむね，前面広縁や矢来内はなく，背面に仏壇が一直線に並ぶ単純な平面で，内陣余間前は引違い建具とされる。これは他の地方とも共通している。北余間背面の床の間はこの養老地方から尾張北部にかけて，一連の地域に分布していることが今迄の調査でわかっているが，それ以外にはどの様に分布しているかは今後の調査に待つものである。この地方の江戸中期以前の中型本堂は図８，10，12に示すように，前面にのみ広縁が付き，外陣は横長となり，内陣前は引違い柳格子で戸締り，来迎装置や後門はなく，古い道場の原型に近い。また堂内外の荘厳は少く未だ邸宅的基調をもっていたことを実例をもって知り得たのである。

（受理　昭和57年１月16日）